

ここに降る雪は気温が低いせいもありパウダースノーなのだ。さらさらとした雪で、雪かきスコップですくって投げ上げると雪がばあつと広がり消えていくように見える。一般的に雪の重さは、新雪では五十〜百五十kg/m³といわれるが、こちらの雪は一番軽い五十kg/m³程度であろうか。それでも十センチメートルほど積もると除雪しなければならぬ雪の量は、七十五m³×0・一mで七・五m³になる。重さにすると三百七十五kgにもなる。そしてこの量の除雪はかなり頻繁にある。

昨年の冬は雪が少ないまま年を越したのだが二月の下旬になってから大雪になってしまった。二日降り続きその間に降った雪は九十五センチメートルになった。ここから一番近い気象庁の観測ポイントでは最高記録だったそうだ。この時期の雪はかなり水分を含んでいてパウダースノーから程遠い。しっかりと固まっているのでスコップで四角い塊を切り出してそれを積み上げるようにして除雪する。おそらく新雪であっても重量的にはこしまり雪だと百五十kg/m³にはなるのではないか。九十五センチメートル降った時の除雪の量は七十五m³×0・九五mで約七十m³になる。その重さはなんと約十トン。そんな大雪が断続的に続き、除雪したところの両側に積み上がる雪壁はどんどん高くなっていく。二月の下旬には私の背丈を軽く越してしまった。

除雪は手作業でやっている。できるだけ機械に頼らず自分の手でできる範囲という考えを除雪まで当てはめる必要はないのだが、まず、除雪機は結構高い。それに置く場所も玄関の近くに確保する必要がある。なんとなく面倒だなと考えているうちにどんどん雪が降り、成り行きで手作業となっている。当然、ご近所は立派な除雪機を持っている。朝早くから除雪機のドドドドという力強い音がして、雪山越しに雪が高く跳ねあげられるのが見える。さすがに大雪が続いた時には気持ちが悪かったが、話を聞いてみると両隣とも除雪機が雪に負けて故障してしまったそう。湿った雪が除雪機の中にへばりついて雪を飛ばす歯を回すベルトが切れてしまったそう。そうなるとうり修理に時間がかかる。それに動いても人の背丈を超える雪山の上まで雪をはねあげるほどの馬力がなく、雪山の壁に当たって足元に落ちてしまうのだそう。こうなると確実なのは人力ということか。おかげでかなりの筋トレになった。

そういう面倒はあるが、やはり雪は美しい。雪が降った早朝に外に出ると昇りかけた朝日を雪の小さな結晶が反射し、そこかしこキラキラと輝いて見える。雪の粒の大きさは気象条件によって様々であるが、時にびっくりするよう大きなサイズの雪になることがある。それは雪の粒というより雪の結晶がつながって羽のようになったもので、スローモーションで見るとゆっくりゆっくり舞い落ちてくる。まるで天上の天使たちが神たちが留守の間に枕を投げ合っていて遊んでいるようだ。雪に落ちる影も深い青みを帯びているし、雪の断面も光の加減で鮮やかな青に見える時がある。雪と風が作り出す雪の造形も優れた彫刻家に迫るものがある。

